

小田巻淑子

(東京服飾造形短大)

<目的> 髪のカラーリングに対する意識は、世代間において異なると思われる。昨年の第52回大会では、女子学生の髪のカラーリングに対する意識とファッション行動について報告した。今回は、女子学生の母親世代を対象に同様の調査を実施し、昨年の女子学生の調査結果と対比しながら考察した。

<方法> 首都圏在住の女子学生の母親世代85名を対象とし、2000年11月から12月に調査を実施した。調査内容は、カラーリング経験やその動機、髪のカラーリングに対する意識15項目(5段階評定尺度)、カラーリングの色の好ましさ(5色、5段階評定尺度)、ファッション行動に対する意識8項目(5段階評定尺度)、派手な色彩のカラーリングに対する意識、若年層や男性のカラーリングに対する意識などである。これらのデータは単純集計、因子分析および平均値の差の検定、相関分析などにより解析した。

<結果> 母親世代の髪のカラーリング経験は68.2%と女子学生の89.2%より低かった。動機については(白髪をかくすため)(若々しくみえるから)などが多く(髪が軽やかにみえる)(似合う洋服が多くなる)など、カラーリングに対する積極性に両者の意識の違いがみられた。カラーリングの色についても、女子学生の50%が経験ありのブリーチ類に対し8.6%と少なかった。カラーリングに対する意識については、(極端な色にすると人の目が気になる)(衣服と同様に髪の色も自由に変えてよい)などに違いがみられた。因子分析の結果、ファッション性など4因子が抽出されたが、母親世代と女子学生の平均因子得点間でt検定をした結果、ファッション性、規範性などの因子に有意な差がみられた。